

日本語学習者の日本語会話解釈上の問題点 : 日本語 学習者によるマンガ理解を通して

Chinami, Kyoko
Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/8669>

出版情報 : 比較社会文化. 11, pp.83-92, 2005-02-20. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン :
権利関係 :

日本語学習者の日本語会話解釈上の問題点 — 日本語学習者によるマンガ理解を通して —

Some Problems in the Learners' Interpretations of Japanese Conversation
— Observation through the reading of MANGA —

因 京 子

キーワード：ストーリー・マンガ，丁寧体，普通体，ジェンダー表現，ポライトネス，
偽装された発話行為，謙虚さ

0：はじめに

本稿は、ストーリー・マンガの読解作業を通じて観察された、日本語母語話者の発話に対する上級またはそれ以上の日本語学習者の解釈に見られる日本人とはかなり異なる認識について分析し、それに基づいて、日本語教育の方法について提案を行うものである。

「失礼な話し方をされた！」と機嫌の悪い留学生の話をよく聞いてみると「～さん、書くもの、ある？なかったら、これ使って」^(註1)などと、失礼どころか非常に親切な発言だったというような体験が筆者には少なからずある。認知的意味の理解よりも丁寧さなどいわゆる「ニュアンス」の解釈が外国人学習者にとって難しいのは驚くべきことではない。丁寧体と普通体、ジェンダー表現など認知的意味に関わらない形式の区別が学習者を悩ませることは日本語教育の現場でもよく知られている。とはいえ、着目されているのは主に適切に使用する上での困難であって^(註2)、上のような解釈上の問題は日本人との接触が増えるにつれて自然に解消されていくと暗黙のうちに期待されているのか、話し方に重点をおいた教材などはいくつか提案されているが^(註3)、解釈の実態調査や訓練方法の開発は殆どなされていない^(註3)。

筆者はストーリー・マンガを用いた日本語と日本社会事情についての授業を2000年後期から実施しているが、その活動を通して明らかになってきたのは、かなり高い日本語運用力を持つ学習者でもしばしば発話者の態度や意図について母語話者とは全く異なる解釈をしており、これには、レベルやジェンダーなど文体を表示する形式の意味や用法に対する理解不足や文化的価値観の違いが大きく関与しているらしいということである。こうした誤解釈^(註4)は、事実や論理関係でなく話者の態度や感情に関わるため、事実関係に照らして自然に訂正されることになりにくく、また、表面化しないため、日本人との接触経験が積み重なるだけ

では解消しないのであろう。

話者の態度や意図についての誤解釈は積み重なれば感情的反発につながる。これがどのように生ずるかを観察しその要因を分析して、日本語教育や異文化理解教育の中で、用法のずれや価値観の相違などについて適切な情報提供を行うことが必要である。本稿は以上のような認識に基づき、まず、ストーリー・マンガ40話^(註5)の読解作業の中で誤解釈と判断されるものが多く見られた会話例と学習者の解釈を報告し、その要因について考察する。

1. マンガ読解に見る学習者の解釈上の問題点

1-1 丁寧体と普通体の解釈の問題点

文末に丁寧体を使うか普通体を使うかは会話参加者の年齢や社会的立場などの「初期条件」によって決まるが、絶対的に固定されているわけではなく、実際にはしばしば基本的ではないレベルが部分的に使われる。ただし、決して自由に移行するのではなく、一定の条件の下で移行が生じ、特定の効果が現れる。^(註6)

丁寧体から普通体への部分的移行が起こる最も典型的な例は、「痛い!」「よかった!」のように思わず発せられる「自発的感情発露」など、「自己向けの発話」^(註7)の場合であるが、会話ではこの現象がしばしばストラテジーとして用いられる。例1は、自己の信念に従って行動するため度々の転勤を余儀なくされる少年院院長とその妻の会話である。妻は、感情の偽りのなさを示すために、普通体を使用して「自己向け発話」を装っている。

例1 (『家裁の人』『ヒトリズカ』)

院長：なあ……

妻：なんですか？

院長：来年あたり、どこかへ飛ばされるかもしれん……

妻：どこだってかまいませんよ。慣れてますから。

院長：3年は落ち着けると思っていたんだが…人吉か…

妻：まあ！だったらカラシレンコンを死ぬほど食べられるわね！

院長：佐世保か……

院長：それなら有田に柿右衛門の窯を見にいけるわ！（下線は筆者による。以下同じ）

この妻の文末レベルの移行について、学習者は、「少年院長という立派な仕事のことを話すときは丁寧体で生活のことを話すときは普通体」（ヨーロッパ）^(註8)「はっきり自己主張をしたいときは普通体」（中国）「緊張がなくなった（から）」（中国）など、「丁寧体＝敬意の表れ、普通体＝その欠如の表れ」という原則に基づいて解釈を行っている。

例2は新米医師の若い女性と患者の中年女性の間のものである。

例2（『研修医なな子』「なな子の涙」）

医師：木本さん、どうですか。

患者：あ、先生。自分じゃどっこともどうもないのに、寝てるのってしんどいわあ。

医師：行き先届けければ、出かけてもいいですよ。

（中略）

患者：癌——なんですかねえ。

医師：ま、それも含めて今検査をしているんですよ。はっきりしたことは手術してみないと……

患者：不思議なもので、自分の病気についてはこわくもなともないんだけど、ただ子どものことだけがかわいそうでねえ。

医師：そんな暗いことばかり言ったら、かわいい息子さんが心配するよ。

基本的には両者ともお互いに丁寧体で話しているが、患者は感情を表現するときには普通体に移行している。医師のほうは、通常感情の訴えには医師としての構えを崩していないが、後半、重大な内面開示に対しては、患者の側からの接近に応える形で、まるで親戚の娘でもあるかのように普通体を用いる。ここは相手の接近への誘いに応じているという点で真の意味でポライト^(註9)であると言える。

患者の発話について学習者は、「患者は病院の『お客様』だから、普通体を使ってもいい」（中国）「年が上だから、普通体を使ってもいい」（中国・韓国）など普通体を立場が上であることの表示と解釈したり、「ひどい病気になって心配で丁寧な言葉を使えない」（中国）など、「過失」と解釈したりしている。医師の用いた普通体についても「若い医師でまだ（こうした難しい状況に）慣れていないから」（アジア）など、「過失」と解釈している。いずれにしても、「普通体＝敬意・配慮の欠如」と見ていて、普通体が意識的にストラテジーとして用いられ、「感情の純粹さ」や「接近への意図」が表示されているという点は認識されていない。

例3と例4は基本的に丁寧体で話している関係で、相手にはっきり反論する場合には丁寧体を用い、不満や怒りはあるものの決定的対立の意図はない場合には「自己向け発話」を装う普通体が現れ、「相手から矛先をずらす」という会話ストラテジーとしての普通体の機能が明瞭に表れた例である。例3は、消防訓練生の女性と教官の会話で、上官命令には絶対服従と強調する教官に対して不満を表明する場合には普通体が現れているが、対立を辞さず反論する場合は丁寧体が使用されている。例4は意地悪な課長と女子事務員の会話であるが、例3と同様に、ちゃんと反論する場合には丁寧体、不満を独りごつ形で憎まれ口を利く場合は普通体が使われている。ここで、正面切って敵対する覚悟がないことは、「なんだ？」と脅しをかけられれば「別に」と否定していることから明らかである。

例3：（『火消し屋小町』「放水訓練」）

教官：しかし現実には（そ）んなこと（＝自分の意志で勝手に動くこと）やらかしたら、退学まではいかなくとも卒業後は一生事務。死ぬまで現場には出られんからそう思え〜。

夏子：それって、教官が古いだけじゃないっすか。いーと思うよ、今どきは、結果オーライならさー。

（教官は無視して立ち去る。）

（中略）

教官：水圧を甘く見るな。女子は3キロだ。

夏子：そんな！差別しないでください。男子と同じにやれます！

例4：（『山口六平太』「大日イヅム」）

有馬課長：ちゃんと仕事しろ、仕事っ。

真弓：べつにサボってたわけじゃありません。

（中略）

有馬課長：（男性の別の課員に）パーカ、（俺はその頃）まだ生まれてねえよ。

真弓：ずーっと生まれてきて欲しくなかった。

有馬課長：ん？なんだあ？

真弓：べつに。

このような例について、学習者の殆どが、普通体の発話の方が怒りが激しく挑戦的であると考えている。例3で、教官が夏子の発言に反論しないことについては、「夏子が本気で怒っているのを怖がっている」と解釈をした者が多い。ここの教官の対応は寛容さの表れというか強者の余裕というか、いずれにしても教官の側の圧倒的強さを感じさせるのであるが、全く逆の解釈をしている。例4についても、負け犬の遠吠え的憎まれ口であることは全く理解されていず、真弓について、「日本女性のイメージとは全く違って、

本音を堂々と出している」(ヨーロッパ)という感想すらあった。普通体による擬似独言の「矛先を相手からずらす」という機能は全く理解されていない。これらの事例からも、学習者が丁寧体と普通体を「丁寧度の違い」という観点からのみ捉えていることが窺われる。

次の例5での普通体と丁寧体の違いは、話者が、相手および自分のペルソナをどう認識しているかによると考えられる。孤島に赴任してくる若い医師に対して、医師を乗せた船を操縦する漁師は普通体、医師を迎える村長と役場の職員は丁寧体及び尊敬形式を用いている。漁師が年下の男に対するもう一人の男、いわば私的な一人の人間として対応しているのに対し、役場職員たちの話し方は典型的な組織人間のそれである。漁師が礼儀知らずというわけではないことは、幼い息子に医師に対する行為を命じた場面で「(薬を)出してさしあげろ」と、私的空間で成立する上下関係はきちんと言語に反映させていることからわかる。

例5 (『Dr.コトー』『Dr.コトー、島に着く』)

漁師：(船酔いしている医師に)先生、大丈夫か。良かったら、酔い止めやるうか？

医師：あー、助かります。

漁師：タケヒロ(=息子)、救急箱に酔い止めあったら、出してさしあげろ。

医師：うぶっ、まいったなー。……(息子が薬をくれたのに)あ、ありがとう。

漁師：先生、あとちょっとだ。がんばんな。

医師：はい、どーも。

(船が着く)

職員：どうも先生、お疲れ様でした。

村長：古志木島へようこそ。村長の大倉です。

医師：どうも、五島健助です。いやあ、船は苦手です……
面目ない……

職員：いやあ、先生に来ていただいてホッとしました。

村長：この3ヶ月、無医村状態でしたからな。これで島民も安心できます。

漁師と村長たちのスピーチ・レベルの違いについて、「村長たちは常識的な挨拶をしましたけど、タケヒロの父(=漁師)はぞんざいな言葉遣いですけど建前ではないと感じました」(中国)と、的を射た解釈も僅かにあったが、最も多かったのは「漁師は高いレベルの教育を受けていないから」(アジア)、次いで、後のストーリーで漁師が誤診から妻を亡くした過去が明らかになることに影響されたためか「医者を用意していないから」(中国)と解釈した者が多かった。正しく解釈した者もあったが、普通体使用が相手への評価というより、話者の自己表現としてのレジスター選択の表示であることを、多くの学習者は認識していない。

次の例6では、基本的には普通体で行われている大人から子供への発話の中に丁寧体が登場する。母親が、幼い自分の娘千恵子と同年代の隣の姉妹初子と姿子に話しているところである。

例6：(『わたしの人形はよい人形』『わたしの人形はよい人形』)

母親：初子ちゃん、あんた、ジープにぶつかったの。

初子：うん、ドッスンって。

母親：まあ！あぶない。なんともないの？

(中略)

千恵子：あ！お母さん、あれ、なーに。

母親：だめよ。チョコのついた手で。大事なもののよ。

お母さんが女学校に入学したとき買ってもらったお人形なのよ。

千恵子：お母さんのお人形なの？お母さんの？どうして、どうして？お母さん、大人じゃない。大人でもお人形がいるの？

母親：あせらなくてもいいのよ。これ、千恵子にあげますよ。でも、大事にしてくれるという約束ができなくちゃだめ。

この丁寧体は、豪華な日本人形を娘に譲るという行為に際して、それに相応しい「改まり」「厳粛さ」を示そうとしたもので、外的環境は同じでも場が変化した、というより、言葉によって意図的に変化させたのである。殆どの学習者はこの移行には注意を払っていないが、この丁寧体への移行に気付いた学習者が一人だけあった。しかしその解釈は、「お母さんは自分の娘は上品に育てようとしているのでいい言葉も使うが、田舎っばい隣の子にはぞんざいな言葉だけでいいと思っているのではないか」というものであった。話者の主体的選択の可能性を考えた点は評価できるが、最終的な解釈は的外れであると言わざるを得ない。一般に学習者は、使用レベルを決定するのは個人の個人に対する「敬意」や「丁寧さ」の多寡だと考えていて、場面の影響については意識が薄い。この場合は特に、仕事の状況か私的な状況かといった明瞭な外的環境の変化があるわけではないため、場の変化を意識しにくい。「言葉が状況に応じる」のではなく「言葉によって状況を作り出す」という言語の能動的な機能について意識化することが必要だと考えられる。また、幼い子供とその親といった圧倒的に私的關係においてすら「改まり」「厳粛さ」が志向されることがあるという点についても、明示的に情報提供をする必要があるだろう。

以上のように、丁寧体と普通体のレベルの選択の含意についての学習者の解釈は、日本語母語話者のそれとはかなり大きく異なる可能性があることが観察される。

2-2 ジェンダー表現の解釈の問題点

会話では一般的に、直接性を回避・減少させることで緩衝作用が生じる。前項であげた「自己向け発話を装う」も直接性を避けるための戦略であるが、話者が自分の通常の話し方とは全く異なる話し方をすることによって一時的に別人であるかのように装うという戦略もよく用いられる。筆者はこれを「他人格モード」^(註10)と呼んでいるが、その実現にはジェンダー表現や方言などがしばしば利用され、深刻さを和らげたり、挑発に逃げ道を作ったり、自己開示に伴う気恥ずかしさを緩和したり、種々の効果を生み出す。

例7は、課長とOLますみの会話である。普段は社会人らしく課長に対して礼儀正しい言葉遣いをしているますみであるが、課長が敵対関係にある常務との難しい話し合いに臨んでいるのを知りつつ居酒屋で待っていたという場面で、ようやく姿を現した課長に対して男性語を用いている。

例7 (『怪傑トド課長』「静かなる決闘」)

課長：あれ？ますみクンだけ？ほかの人たちは？

ますみ：とっくに次の店に行っちゃいましたっ、おいつ、
トド課長！心配して待ってたんだぞォー。

課長：え？

ますみ：外食4課の八田さんのことで、滝沢常務にクビに
されちゃうんじゃないかって……

課長：なんだ、知ってたのかあ。

心配していた気持を伝えるのに普段通り丁寧体を用いていれば、部下としての常識的な範囲の気持以上のものは伝わらないが、男性語を用いる「他人格モード」によって自己韜晦しているため、単なる部下としての気持以上の真摯な好意の存在が推測され、実質的には彼女からの愛情告白となっている。これに関して学習者は、この言葉遣いがますみの発話として普通のものではないことは認識しているものの、その理由としては「酔っ払っていたから」(中国)「待たされて怒ったから」(中国・ヨーロッパ)「あまり心配していたので、顔を見て緊張がほぐれて腹が立ってきたから」(韓国)などとしている。3番目の解釈のように心理を掘り下げてみようとしている者もあるが、基本的には他の学習者と同様「礼儀を忘れたため」と解釈しており、意図的な逸脱であることを認識していない。それぞれの話者に期待される使用範囲(「わきまえ」)からの意図的な逸脱による会話戦略についての理解を進めるには、まず、「わきまえ」の存在について明示的に知識を提供し、意図的に行われる逸脱(戦略)とうっかり行われる逸脱(無作法)との区別について意識化しなければならない。

例8は、エステティック・サロンの女性店長と修行中の

店員との会話である。なかなか自律的に動こうとしない店員に店長の苛立ちは募っていき、最後には怒りを爆発させているが、男性語使用によって他人格モードになっているため、表現調整(ここでは滑稽味)への意志が感じられ、最終的にはまだ許していることがわかる。「自分で考えてね」または「自分で考えてください」など、店長のアイデンティティから期待される範囲内の表現であったとしたら、本音を冷静に突きつけていることになり、突き放した感じになるだろう。

例8 (『雲の上のキスケさん』「PART 7」)

店長：じゃあ早速、これの清書からお願いね。

眉子：あの、この字はなんて読むので……

店長：前後の文章から推察しなさい！

(中略)

眉子：終わりました。次は何を……

店長：自分で考えろっ。

この男性語使用に関して学習者は、「激しい怒りが表明された」(中国)「忍耐が完全になくなった」(韓国)などと解釈していて、この発話の持つ温かみは認識していない。他の作品中の男性語使用の類例^(註11)についても、「怒ったとき」「緊急の場面で丁寧にする余裕がない」などと受け取っていて、女性による男性語使用が意図的な戦略としての逸脱であるということにはほとんど気づかない。ジェンダー表現についてもレベルと同様、上品な表現から粗暴な表現までが一直線のスケールを成していて、態度や感情に呼応して選択されると考えているようである。

2-3 「偽装された親切」の解釈上の問題点

会話の中には、親切な意図があってもそれを直截に表現するのではなく一見歓迎されにくい攻撃的な発話の形をとるなど、いわば、真意が偽装されることがしばしばある。例9は、親をなくした狸の子に自分の食事の一部をこっそり分け与えている少年の修行僧(芳春)に、和尚が話している場面である。

例9：(『雨柳堂夢咄』「おもかげ行灯」)

和尚：こーら、芳春！お前はこの頃わざと食事を残しては
どこへ持っていくのじゃ？わしが知らんと思うとの
のか。

芳春：あの……あの……それは……

和尚：ほれ。檀家でもろうた饅頭じゃ。お前のような年頃
の者があまり腹をすかせてはいかん。食べなさい。

見かけ上は叱責し強要しているようであるが、これが芳春に遠慮させないようにするための和尚の配慮であること

は日本語母語話者には明らかである。しかし学習者は、殆どの者が「勝手なことをしたので怒られた」(中国)「芳春が秘密を持っていたことが和尚は気に入らない」(アジア)と、「荒々しい言葉は怒りを示す」という前提を疑っていない。「厳しい言い方だが、一番偉い僧だから、いばっても当然だ」(中国)と、荒い言葉遣いの裏には対立的意図があるものと思いついでいる。

例10では、初めて担当した患者の死に直面して涙が止まらない新米医師を指導医が叱りつけている。この例においても、「叱責」という攻撃的発話行為の形をとっているがその裏に「励ます」という親和的意図が存在する。

例10：(『研修医なな子』「なな子の涙」)

研修医：ずっ……ずずっ (涙と涙をすすっている)

指導医：いつまでべそべそやってんだっ。ほかの患者さんがびっくりするだろう。

研修医：……はい。

指導医：最初からわかってたことじゃないか。医者とはそういう仕事だし、病院とはそういう所なんだ。だからって、医者や看護婦がいちいち落ち込んでちゃだめなんだ……

これについては、「落ち込んでいる新米医師に元気を出そう(ママ)としている」(中国)「現実を受け入れるように励ましている」(中国)など、適切な解釈も見られたが、「患者さんがびっくりするような医師はだめだといっている」

(アジア)「他の患者への影響を心配している」(中国)など、額面通りの意味しか受け取っていない者が多数である。実はこの例については、叱っている指導医の顔には「大粒の汗」という内面の困惑を示す記号があり、また、この例についての解釈を求めたワークシートには他の同様の例についてのモデル解答として「たしなめることによって励ましている」と、ヒントになる記述を提示しておいたのであるが、類例だと認識した者は半数程度に止まり、字義通りの解釈の壁を打ち破ることの難しさが感じられた。

しかしながら、「偽装された意図」の解釈が全て難しいわけではない。例えば、次の例11については、一見「義務の解除」のようであるが実は「禁止」であることを理解するのはそれほど困難ではない。エステティックの店長が、顔中に吹き出物ができている店員に話している会話である。

例11：(『雲の上のキスケさん』「Part 7」)

店長：石井さん、今日はこっち(=店の表側) 出てこなく
ていいから。

石井：でも……仕事が……

店長：そのじんましんだらけの顔でお客様に「自己管理してください」って言えるわけ？

この例は、別物のように装われているのが親和的な意図ではなく対立的・攻撃的な意図である点で前の2例とは異なる。学習者にとっては、攻撃的な意図を偽装する動機はわかりやすいが、親和的意図をなぜ直截に表示しないのかは、理解しにくいようである。「偽装された親切」の誤解釈は、双方の理解のずれが深刻な反感につながりかねず、看過できない問題である。

2-4 上位者の行動の解釈上の問題点

日本語の運用の習慣の中で特に学習者に理解されにくいのは、社会的上位者の態度や言葉遣いの意味である。目下の者が目上の者に対して丁寧体を使うのは当然であるが、逆に目上の者が目下に普通体を用いるかというところではなく、丁寧体で話すことの方が社会的場面ではむしろ一般的である。従って、普通体の使用は、上位者であることの単純な表示でもあり得るが、打ち解けた雰囲気を作り出すための意識的な選択の結果であることが多い。^(註12)本稿の冒頭で触れた、「失礼な言葉遣い！」と留学生に決め付けられてしまった日本人も、きっと、「ウチ」に受け入れる態度、親愛の情の表示として普通体を使用したに違いない。

行動についても、日本社会では上位者であっても謙虚に振舞うことが評価される。上位者としての権威や権利をあからさまに発揮することにはリスクが伴い、謙虚な態度を見せるほうが無難なのである。

例12では、家庭裁判所に新しく赴任した所長が、前任の所長・最上位の調査官の宮下・裁判官や調査官たちを相手に、赴任の挨拶をしている。自分のほうが少し下位と考えられる相手、自分が上位であるがそれを明確にしない方がよいと考えられる相手、自分が上位であることをある程度はっきり示しても差し支えない相手と、同じ行為が3つの異なる状況においてどう変化するかが観察できる興味深い例である。

例12：(『家裁の人』「スマイル」)

所長：(電話で) あ、どうも。私、兼松さんの後任として本日、緑山家裁の所長に着任しました……浜口です。ご挨拶だけでもと思ひまして。……はい、なかなか落ち着いたいい職場ですね。……ええ……高裁の、右陪席からの異動ですから、所長の仕事は何一つ知らないんですよ。いろいろお教え願います。

(しばらく後で、調査官と二人きりで)

所長：何と言っても裁判官と調査官のチームワークがあるからこそ、膨大な事件処理が可能なのですね。

宮下：はい。

所長：宮下さんには、ますますお力をお借りしないとね。

宮下：こちらこそ！微力ながら迅速な事件処理ができるよう、力を尽くしたいと……ええ。

(しばらく後で、職員を集めて)

所長：皆さんご存知のように、私は所長としてはルーキーであります。ま、みてくれは、ルーキーとは言えませんかね。よろしく！

言語面では、はじめの上位者に対する挨拶では親しみのストラテジーを用いず、次のベテラン調査官に対する挨拶では「明確なレベル表示の回避」というストラテジーを用い、最後の例では「冗談」という上位者が多用するストラテジーを用いており、相手の立場によって使い分けをしている。しかし、内容は、どの例でも「自分は未熟だから助けて欲しい」と、「謙虚さ」を前面に出している。日本人にとってはごく当たり前の挨拶である。このような挨拶に対して、「強い違和感がある」と言ったのは半数ぐらいであったが、「同様の挨拶をしたらあなたの国ではどう思われるか」という問いには、「劣等感に苦しんでいると思われるだろう」(ヨーロッパ)、「自分の国でも官僚などであればこういう人はいるだろうが、お世辞を使う人で誠実ではないと思われる」(中国)、「下の人たちは無能な上司を不安に思うだろう」(アジア)、「自分の方針を全く述べないのが変だ」(中国)、「嘘つき」(ヨーロッパ)と、否定的な回答が圧倒的に多かった。韓国・台湾出身の学習者各1名は、「自分の国でも謙虚な礼儀正しい挨拶である」と回答した。このように、日本では美德とされる「上位者の謙虚さ」は、必ずしも理解・評価されるとは限らない。日本の文化的価値観についての情報提供を行って、少なくとも「不誠実」ではないことについては、伝える必要があると考える。

上位者でも謙虚に振舞うことが評価される社会では、上位者であっても相手の欠点を明瞭に指摘することにはリスクが伴う。それだけに、言いにくいことをはっきり言ってくれる人は有難いと感謝すべきだとも言える。しかし、そうした見方は、学習者には共有されにくいようである。次の例13は、例8と例11でも取り上げた『雲の上のキスケさん』の1場面である。この引用部に至るまでに、店員の眉子は(例11のような)ミスをいろいろと犯しているのだが、今回は、店の客に迷惑をかけてしまうような決定的な失敗をしてしまった。

例13 (『雲の上のキスケさん』「Part'7」)

店長：きのう、最後までいて鍵を閉めたのはどっち？

眉子：はい、私です。

店長：今朝お店に出てきたら、泥風呂の温度設定が120度になっていて煮立ってたわよ。どういうこと？！

眉子：あ！

店長：どうするつもり？午前中のお客様は入れないわよ。まだ70度あるんだから。石井さん(=眉子)、私いま怒鳴る体力がもったいないから怒鳴らないけど、本

当はあなたを殴り倒したいくらい怒ってるのよ。最近特に気が散っているみたいだし、ここに来て半年経ったけど、あなた一人ですることってある？マッサージ法一つにしたって、順序すら覚えてないじゃない。

眉子：……それは……

店長：仕事は集中して覚えなさい。私が3日間の講習で覚えてきたことを同じ3日でやれとは言わないから、せめて一ヶ月なら一ヶ月と決めて、徹底してやりなさい。それができないなら、徹底して雑用の人にならなさい。そのかわり、もう技術は教えない。こっちはお金払って、その上技術を教えてあげてるの。ヨソ見するひとはヨソへ行って来ていいわ。

眉子：……

(翌日になって)

眉子：店長。雑用でもいいから使ってください。お客様の送迎も、今ペーパーだけけど免許あるんで、練習します。とにかくやれることからやっていきますから、何でも、

店長：えらいっ!!

眉子：へっ？

店長：そう言えるか言えないかが、実は一番大きな差なのよ。

6ヶ月の観察を経て、このような大失敗を機にピシヤリと店員をたしなめている店長の行動や言葉遣いは決して理不尽ではなく、また、翌日に謝罪してやる気を見せた相手の出方を誉めて励ますなど、公平な態度で指導してくれる理想的な上司であると筆者には思えたが、学習者の解釈は1名を除き散々であった。穏便な方からあげると、「日本では上司と部下の関係がはっきりしているが、仕方がないと思う」(中国)「部下が上司に不満があっても言えないのは仕方がないと思う。中国人はこういう傲慢な上司には慣れている」(中国)など、支持はできないが我慢するという回答があった。多かったのは、「このようにあまりにも自分は上司だと強調すると部下は反発すると思う」(アジア)「店長は生意気な人だと思う」(中国)など、全面的拒否である。その中で、日本滞在が長い韓国人学習者1名が、「店長の行動及び態度に全く違和感はない。反省してきたのを偉いと評価して次の仕事を与えたのに眉子は感謝すべきであり、頑張れると思う」と述べたのが目をひいた。個人によって感じ方が違うことが改めてわかるが、この店長のような行動が理解を得にくいことは日本人側としては知っておく必要があるだろう。

大多数の学習者が「店長」を評価しないのは、実は彼らが上位者の絶対的優位を前提としていて、そのためにどん

な場合にも上位者には強者として「やさしさ」「配慮」「保護」を期待しているからのように思われる。大失敗を大目に見たり、いつも優しい態度であるとしたら、それはその相手に対する評価と期待が低いことを意味するのであるが、これは上位者と下位者との相互性、「持ちつ持たれつ」を前提とする日本の価値観に基づく解釈であるらしい。このことを日本人側は認識し、背後にある文化について明示的情報を準備する必要があるだろう。

3. 誤解釈の要因

前節で述べたような解釈のずれに関与する要因として、少なくとも次の3つが考えられる：1) 日本語の文体の表示方法の複雑さ、2) 日本語のポライトネスの中間的な性質、3) 日本語教育上の問題点である。

3-1 日本語の文体表示の複雑さ

日本語にはレベルの区別、ジェンダー表現など、認知的意味の形成には直接関与しない形式があり、文末においてそれらの形式について「不使用」「回避」を含めて何らかの選択をすることが必須である。どの言語にも種々の文体が存在するのであるが、このような特別の形式が存在せず語彙や構造の選択、音声などによって文体が表示される母語を持つ学習者には、日本語の文体形式の示す意味が体感されにくいのは当然である。しかも、例えば文中におけるレベル選択は話者の選択ではなく構造的に決定されるなど、文体形式選択の原理も一様ではない。

加えて学習者を混乱させるのは、日本語の文体の表示には文末の形式だけでなく他の言語と同様に語彙や構造、音声なども関わり、しかも他の多くの言語に存在しない「尊敬語」「終助詞」などの要素も関与し、それらの総体として文体が表現されることである。言うまでもないが「総体」というのは必ずしも「総和」ではなく、一見矛盾する選択が両立していることも多い。筆者はある留学生に『「Aさん、あした来ますか」と『Aさん、あしたいらっしゃる?』とはどっちが丁寧なんですか?』と問われたことがあるが、確かに、丁寧さという観点からのみ考えていけば混乱するのは当然だろう。表示方法だけでなく、機能も一様ではないのである。

3-2 日本語のポライトネスの中間的な性質

Brown & Levinson (1987) は、敬語行動の普遍的な性質を説明するものとして「フェイス」を中核とした理論を構築したが、日本語や韓国語などの言語を話す立場からは、個人の領域の保持よりも社会の中での協調が重視される社会においては、社会的秩序の認識とそれへの準拠

の意識（「わきまえ」）がまず基本にあると指摘されている（Matusmoto1988, Ide1989, 松村1999, 松村・因2000他）。

日本語のポライトネスは、「わきまえ」を基本としながらも、西欧語にあるような「話者の自由意志」に基づくストラテジーが多く見られるという点で、構造的・文化的類似性が高いと言われる韓国語などとも異なる（李・松村2003, 因・金2004, 因2004 b, Matsumura, Chinami & Kim forthcoming 他）。縦の上下関係の認識の表示が敬意表現における圧倒的な主要因である韓国語に対し、日本語では横方向のウチ・ソトの意識も関与し、また、ウチの範囲は流動的で場合によって伸び縮みする。また、上下関係の認識とその表示は基本的必須要因ではあるが、「調和」が重視され「謙虚さ」が高い価値を持つ文化であるため、「上」の側からの「上」の表示はしばしば無化され、そういう場合には「下」の側も上下関係の明らかな表示を巧妙に回避し、一見対等に見える対話が成立する。そのような中ではお互いの自由意志に基づくストラテジーが専ら使われるように見えるが、使用されるストラテジーの選択は「わきまえ」に影響され、また、一見対等に見える中でも時折「わきまえ」を示すことが、少なくとも下位の話者にとっては、必須である。このように、「わきまえ」の要素と「自由意志」の要素が交錯するのは、談話だけでなく、長期的関係における行動にも当てはまることで、親しい仲でも何かの機会が生ずれば改まった言葉遣いではじめをつけることはごく普通であるが、これにも違和感を覚える学習者が珍しくない。

縦の上下関係を尊重しながらも、対等的関係という「ポライト・フィクション」^(註13)もある程度成立させようとする日本語のポライトネスの中間的な性質は、自由意志が社会秩序かのどちらかが支配的影響要因として働く運用原則に比べれば、かなり理解も運用も難しいと考えられる。

3-3 日本語教育の問題点

日本語初級教育では、動詞や形容詞は丁寧体をまず導入しモデル会話や対話練習なども全て丁寧体で、普通体は、「ウチ」の会話や記述で使われる形としてではなく、連体修飾節や埋め込み文等で構造上義務的な形式として導入されるのが一般的である。普通体を文末に用いて話す練習を行うことは殆どなく、普通体の会話については「ウチのグループの親しい人と話すとき」^(註14)のような簡単な説明が行われる。

日本語を学び始めたばかりの段階では、簡単明快ではない文体の機能について多くの情報を提供するのを控えるのは妥当な方針であろうが、それでは、どこかの段階で十分な情報提供がなされているかという点、現在のところ、中級以上になっても文体の機能について体系的説明が行われ

注

- 大学の事務所の係員の発話。「ある?」「使って」が、「ありますか?」「使ってください」であるべきだとこの留学生は思っている。別の同様の発話に、「子ども扱われた」と怒っていた例もある。
- ビジネスマン向けの教科書『すぐに話せる日本語』(凡人社),『待遇表現』(ジャパントイムズ)など。
- 解釈に関する最近の研究としては,李・松村(2003),因(2005,印刷中)がある。
- 母語話者の解釈にもゆれがあり,学習者の解釈も一つの可能性として必ずしも「誤り」とは断定できないが,一般的な母語話者の解釈とずれていると判断されるものを本稿では便宜的に「誤解釈」と呼ぶ。
- これまでに教材として使用した作品は以下の通り。

シリーズ1:OLはつらいよ(11作品)

- 「気配りの人」「あんぱんとOL」
(以上2作品『無印OL物語』,群ようこ原作,和田育子他,角川書店)
- 「10月の新入社員」「プロフェッショナル」「うるわしの局」
(以上3作品『9時から5時半まで』逢坂みえこ,Young You 特別企画文庫,集英社)
- 「マラソンの戦い」「赤壁の戦い」「インカの黄金」「アマテラスの戦い」
(以上4作品,『4階のミズ桜子』上・下,里中満智子,双葉文庫)
- 「うちのママが言うことには」岩館真理子,Young You 特別企画文庫,集英社
- 「毎日が夏休み」「つるばらつるばら」大島弓子,白泉社文庫

シリーズ2:日本の名作(9作品)

- 「霧笛」「ウは宇宙船のウ」萩尾望都,レイ・ブラッドベリ原作,小学館文庫
- 「銀杏の実」「ロングロングケーキ」大島弓子,宮沢賢治原作,白泉社文庫
- 「夏の夜の猿」「つるばらつるばら」大島弓子,白泉社文庫
- 「おもかげ行灯」「雨柳堂夢咄3」波津彬子,朝日ソノラマ文庫
- 「私の人形はよい人形」山岸涼子,文春文庫
- 「名人二代」「寄席芸人伝1」古谷三敏,小学館
- 「イグアナの娘」「イグアナの娘」萩尾望都,小学館文庫
- 「半神」「半神」萩尾望都,小学館文庫
- 「夢虫・未草」「ダリアの帯」大島弓子,白泉社

シリーズ3:働く女たち(10作品)

- 「はじめての手術」「なな子の涙」「医者と看護婦」
(以上2作品『研修医なな子』①と④,森本梢子,集英社漫画文庫)
- 「太モモに注射針」「無邪気な彼女は何処へ」(以上2作品『おたんこナース1』佐々木倫子,ビッグスピリッツコミックス,小学館)
- 「MAMA No.1」「MAMA」池谷理香子,Young Youコミックス,集英社
- 「消火訓練」「放水訓練」(以上2作品『火消し屋小町』1と3,逢坂みえこ,ビッグコミックススペシャル,小学館)
- 「Part 1」「Part 7」(以上2作品,『雲の上のキスケさん』①と③,鴨居まさね,ヤングユーコミックス,集英社)

シリーズ4:市井のヒーローたち(10作品)

- 「Dr.コトー,島に着く」「Dr.コトー,また船に乗る」(以上2作品,『Dr.コトー診療所①』山田孝敏,ヤングサ

ンデーコミックス,小学館)

「大日イヅム」「じいちゃんのプー」(以上2作品『山口六平太』②と③,林律雄・高井研一郎,ビッグ・コミックス,小学館)

「ヒトリシズカ」「スマイル」(以上2作品『家裁の人』②と⑤,毛利甚八・魚戸おさむ,小学館文庫)

「眠れるトド起つ」「静かなる決闘」(以上2作品『怪傑トド課長』1と4,過度橋靖人,講談社文庫)

「特製極厚カツ丼」「ミスター味っ子」1 寺沢大介,講談社文庫

「毎日が夏休み」(前出)

6 cf. 松村・因(2000) 科学研究費補助金研究成果報告書『日本語の談話におけるスタイル交替の実態とその効果についての分析』pp.36-39

7 cf. Makino & Tsutsui(1986) p.43 "It is interesting to note that whenever the speaker takes a speaker-oriented position he switches his style from formal to informal, even in a formal situation." (興味深いことに,話者が話者向けの立場をとる場合には,丁寧体使用の状況の中でも話者は文体を丁寧体から普通体に移行させる)。

8 学習者によるコメントを引用する場合には,引用の後に個人が特定できない範囲で出身地を示す。

9 cf. 松村・因(2000) 科学研究費補助金研究成果報告書『日本語の談話におけるスタイル交替の実態とその効果についての分析』p.62-64.年長の司会者が改まった口調から少しぞんざいな口調に移ったとき,会話12ではわきまの範囲を守りつつも冗談めいた口調となるが,会話13では改まった口調をくずさない。言葉を崩した会話12の話者のほうが,「相手への同調」ストラテジーを用いていて,ボライト(表現の表面的レベルへの言及との混同を避けるため,最終的效果としての丁寧さについては「ボライト」を用いる)と感じられる。

10 cf. 因京子(2003),因京子(2004a)

11 『火消し屋小町』『4階のミズ桜子』『9時から5時まで』など複数の作品の中の女性の男性語使用について解釈を尋ねた。

12 Matsumura, M., K.Chinami and S-J. Kim(forthcoming).

13 直塚(1980)

14 英語圏出身者及び英語を解する学習者に広く利用されている Makino & Tsutui (1986) には, "The formal style is normally used when one is NOT speaking intimately or personally with someone who belongs to his in-group. ……Students of Japanese will usually be exposed to the formal style in their beginning textbook, because it is the proper stylistic register for adults.(pp.42-43)." とある。

15 Makino & Tsutsui (1986)では,徹底的に「上下」という観点から丁寧レベルの用法を説明している。

"What are the appropriate situations for polite sentences? Generally speaking, an inferior uses polite speech to an addressee or the person presented as the topic of the sentence. Typical situations are: Student to teacher; subordinate to boss; salesperson to customer; junior to senior (pp43-44).

更には, "Sometimes, an older person uses polite expressions when he is asking a favor of a younger person. Under such circumstance, the older person feels psychologically inferior to the person he is addressing." と述べる。これでは学習者が「普通体なんか使われた!」と怒るのも無理はないかもしれない。また,年長者は丁寧体など使わないように気をつけなければ,うっかり使うと何か頼もうと下心があると思われてしまうだろう。

参考文献

井出祥子他(1986)『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲

- 堂。
井出祥子(1997)「女性語の世界—女性語研究の新展開を求めて」『女性語の世界』1-14, 明治書院。
李奈娟・松村瑞子。(2003)「日本語と韓国語における敬意表現」『韓日言語文化研究』第4巻, 55-70, 韓日言語文化研究会。
因京子(2001)「マンガを用いた日本語教育の視点と方法」『韓日言語文化研究』第2巻, 131-50, 韓日言語文化研究会。
_____ (2002)「研究留学生を対象とする社会生活技能教育教材—専門日本語教育と並ぶもう一つの課題—」『韓日言語文化研究』第3巻, 73-93, 韓日言語文化研究会。
_____ (2003)「マンガに見るジェンダー表現の機能」『日本語とジェンダー』第3号, 17-26, 日本語ジェンダー学会。
_____ (2004 a)「ジェンダー表現の機能」『言葉のからくり: 川上誓作教授体感記念論文集』773-85, 英宝社。
_____ (2004 b)『マンガで学ぶ日本語: 働く女性たち』九州大学留学生センター。
_____ (2005)「マンガ読解に見る韓国人学習者の日本語理解」『韓日言語文化研究』第5巻掲載予定, 掲載ページ未定。
直塚玲子(1980)『欧米人が沈黙する時』大修館
松村瑞子・因京子(1998)「日本語談話におけるスタイル交替の実態とその効果」『言語科学』第33号, 109-18, 九州大学言語文化研究会
_____・_____ (2000) 科学研究費補助金報告書『日本語の談話におけるスタイル交替の実態とその効果についての分析』
Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Use*. Cambridge: Cambridge University Press.
Ide, Sachiko (1989) "Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of politeness, *Multilingua* 8-2/3, 223-48.
Leech, Geoffrey (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
Makino & Tsutsui (1986) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*, The Japan Times.
Makino & Tsutsui (1995) *A Dictionary of Intermediate Japanese Grammar*, The Japan Times.
Matsumura, Yoshiko, Kyoko Chinami and Soo-Jeon Kim (forthcoming) "Japanese and Korean Politeness: A discourse-based contrastive analysis", based on the presentation at the Interna-

tional Conference of Language, Politeness and Gender: the pragmatic roots, on September 3, 2004, at University of Helsinki.